明星学園中学校特別授業

この人に会いたい

報告集

明星学園中学校·高等学校

明星学園中学校 特別授業

この人に会いたい

明星学園中学校

もくじ　特別授業「この人に会いたい」講師一覧

P7 安田菜津紀さん（フォトジャーナリスト）
「写真で伝える仕事」～カンボジア・東北の被災地から～

P10 菅谷 昭さん（元医師、単身ベラルーシに医療支援に。現松本市長）
「21世紀を生きる君たちへの期待」

P12 アーサー・ビナードさん（詩人・俳人・随筆家）
「そこに込められていた深い意味」

P16 ダグラス・ラミスさん（政治学者・「世界がもし100人の村だったら」監修）
「世界で今起きていること」

P18 植原量行さん（東海大学海洋学部海洋地球科学科教授）
「海ってなんだろう」

P20 雨宮彩葉さん（ピアニスト）・AYUKOさん（ボーカリスト）
「ピアニストって何？音楽の魅力に迫る」

P22 早稲田大学男声合唱団 Chor Flügel
「合唱ワークショップ」

P24 「ヤイレンカ」（アイヌ女性ユニット）
「アイヌの文化を学ぶ」

P26 沙央くらまさん（元宝塚歌劇団・卒業生）
「夢を叶える」

P28 柳亭小痴楽さん（落語家・卒業生）
「落語の授業」

P30 佐藤節子さん（着物染織家）
「着物の授業」

P32 小谷孝子さん（被爆体験腹話術証言者）・渡辺里香さん（ピースボート）
「被爆者の声を聴く」

P35 田島夏子さん（京都大学野生動物センター）
「私のイルカ研究」

P36 佐藤和孝さん（ジャーナリスト）
「信念を持って仕事をするということ」

P38 三輪 悟さん（上智大学アジア人材養成センター）
「カンボジアの世界遺産―アンコール遺跡群を護る」

P40 保立道久さん（元東京大学史料編纂所教授）
「地震火山列島の歴史を考える」

P41 馬場龍一郎さん（カメラマン）
「なぜ人は人の写真を撮るんだろう」

P43 西江昭吾さん（沖縄タイムス東京支社 報道部長）
「地元紙が伝える沖縄」～沖縄に軸足を置いた報道～

P45 畑口勇人さん（浅川伯教・巧兄弟資料館学芸員）
浅川巧の生き方　～「共に生きる感覚」とはなにか～

番外編　大人向け講座

P47 中村桂子さん（JT生命誌研究館館長）
「子どもたちの生きる力を信じて」

P48 伊勢崎賢治さん（東京外国語大学総合国際学研究員教授）
「平和はつくれるか」

P50 高橋源一郎さん（小説家・明治学院大学教授）
「ぼくらの学校なんだぜ」

特別授業『この人に会いたい』巻頭文

中学校副校長　堀内雅人

明星学園中学校では、社会の一線で活躍する「おとな」をお招きし、特別授業『この人に会いたい』を実施しています。学校がカリキュラムとして決めている企画ではありません。学年の教員や生徒から出てきた声が実現していきます。

「一般の講演会依頼ならお断りしているんです。でも、中学生に求められたのではお断りできません」。笑顔でそう言ってくださった方がいらっしゃいました。

「大人相手の講演なら慣れているのですが、中学生に話をするのは初めてなんです」。不安そうな面持ちで来校された方もいらっしゃいました。そこでは、講師の先生の人生が、貴重な経験が、ご専門の学問が語られます。その方にしかできないお話です。生徒は夢中になって聞いています。どこまで理解できているのかは正直分かりません。しかし、何かが伝わっているのを感じます。

講師の先生に共通しているのは、自分にできることを見つけ、自分の個性を誰かのために活かそうとしている姿です。ただ、ご自身のやるべきことを見つけるきっかけは、けして幸福な出来事だったとは限りません。広島で被爆したこと。中学校時代に立て続けに家族を失ったこと。チェルノブイリの原発事故の影響で甲状腺がんに苦しんでいる子どもたちの映像を見たこと。

生徒たちには、自分の夢を見つけてほしいと思っています。自分の人生を歩んでほしいと願っています。しかし、自分の思い通りにすべてがいくことなどありません。この先大きな挫折も経験するでしょう。その挫折からどう立ち直るか、いや挫折をばねにどう前へ進むことができるか。それが生きる力だと思うのです。だからこそ、中学生時代にたくさんの本物の大人に出会ってほしいのです。

講師の先生のお話からは常に中学生への温かなメッセージを感じます。「自分自身で感じ、自分の頭で考えてみよう」。人生に正解などないことを知らされます。「考えているだけではなく、行動してみよう」。「たとえ当初の思い通りにはいかなかったとしても、行動してみることで思いもしなかった展開が生まれてくる、思いもしなかった宝を発見することができる」。結果を求めるからこそ行動することに躊躇してしまうのでしょう。失敗を恐れない勇気。そして、プロセスの大切さ。

授業の後、しばしば講師の先生からこんな感想をいただきます。「生徒の質問にドキッとさせられました。一見素朴そうに見えて本質的なことを聞きますね。大人の講演会や他の中学校では、どのような質問が出るのか大体想定できるんです。明星学園の中学生はちがいますね。とても面白かったです。」明星学園の教員であることを誇らしく思える瞬間です。と同時に日頃から、本当に本質を見極める力をつける実践ができているのか、改めて身が引き締まる瞬間でもあります。

この小冊子は、学園ホームページのリニューアルを機に、それまで書き溜めてきた「中学校ニュースブログ」のうちの「特別授業」の記事を抜き出し、まとめたものです。定期的にこのような授業を企画することができるというのは、一人一人の教員が目の前にいる生徒と真摯に向き合い、その時々にどのような出会いを彼らにプレゼントしようかと常にアンテナを張っている証であろうと思います。

リニューアルされたホームページでは、さまざまな形で学園の様子をお伝えしてまいります。ご感想、ご意見等いただければうれしく思います。今後ともご支援を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

写真で伝える仕事
～カンボジア・東北の被災地から～

安田菜津紀さん（フォトジャーナリスト）

1987年神奈川県生まれ。16歳のとき、「国境なき子どもたち」友情のレポーターとしてカンボジアで貧困にされされる子どもたちを取材。現在、カンボジアを中心に、東南アジア、中東、アフリカ、日本国内で貧困や災害の取材を進める。東日本大震災以降は陸前高田市を中心に、被災地を記録し続けている。

２月７日（水）、１年生、３年生の特別授業のためにフォトジャーナリストとして活躍されている安田菜津紀さんが、来校してくださいました。たまたま本屋さんで『写真で伝える仕事』という安田さんの本に出会い、安田さんの撮る人々の写真に強く惹きつけられました。安田さんはどうしてこういう写真を撮ることができるのだろう。安田さんが写真を通して伝えたいと想っていることをぜひ明星生と一緒に聞きたいと、企画したのがこの時間です。

世界のあちこちを飛び回っている安田さんですが、今回は、安田さんがこの仕事を選ぶきっかけになったカンボジアの写真と、ご家族のご縁で通い続けている陸前高田の写真を中心にお話をしてくださいました。

安田さんが大切な家族を立て続けに亡くし、家族って何だろうともやもやした思いを抱えていた高校生の時に出会ったのが、“トラフィックチルドレン”と呼ばれるカンボジアの子どもたちでした。自分自身に値段がつけられ、暴力をふるわれるなど、たくさん傷ついてきたのに、気にかけるのは自分のことではなく家族のこと。そういう強さとやさしさを目の当たりにし、何か「返したい」と思った、それがフォトジャーナリストを目指した原点だったそうです。

安田さんの写真に心惹かれるのは、何度も通い続けることで人とのつながりを大事にするところにあるのでしょう。カンボジアにも年に１～２回は訪ねているそうで、そこで出会ったココナッツおじさんが安田さんに向けた笑顔の１枚が、個人的には強く心に残りました。両足を地雷で失ってしまったココナッツおじさんが、

生きている意味を失いそうになった時に踏みとどまったのは、愛する奥さんの存在だったとか。また、2011年4月に気仙小学校に入学した2人の新入生を囲んで撮られた記念写真。先生方も被災者でありながら、新入生を迎えることができるのは希望のあかしだと、新入生の2人を迎えるために奔走していたそうです。そんな2人の成長を節目ごとに追いかけている安田さんの写真から、温かいものが伝わってきました。安田さんの写真に心惹かれるのは、戦争や震災が起きた所でも悲しいだけではない「日常」があるということを思い起こさせてくれるからではないでしょうか。しかも、陸前高田に通い続けている安田さんは、なんと、船の免許もとったそうです。すごい！

「とても感動しました！安田さんは、あとから自分が撮った写真を見返して、どんなことを思いますか？」「カンボジアに行くことに不安や恐怖はなかったのですか？」「傷ついた子や見知らぬ子の心の壁を、どう取り払って笑顔にしているのですか？」「もし震災などに遭遇したら、写真を撮ることを優先するのですか？助けることを優先するのですか？」などなど。1・3年生からの質問は尽きることなく、あっという間に質疑応答の時間も過ぎていき、最後はじゃんけんでという一幕も。

安田さんが「写真ができることは最後の一握りだけ」とお話になりました。写真を通して語ってくれる人たちの「日常」が届けてくれる「一握り」は、私たちの心をふるわせる大きな力を持っているのだなぁと実感しました。「大切な人の大切な人は、自分にとっても大切な人」、「ひとりの人間が全部の役割はできない。けれども、それぞれができることをちょっとずつ持ち寄れば、小さな力でも大きな力になる。どんな立場でも、必ず持ち寄りあえる役割があると思っている」という安田さんの言葉に大きなエールをもらったような気がします。

そんな安田さんに聞きたいこと、伝えたいことがたくさん残っていた子たちが、講演会が終わってからも安田さんの周りに集まり、安田さんを放しません。また、いつかどこかで再会できることを願っています。本当にありがとうございました。

［生徒たちの反応］

◎カンボジアのお話で一番心に残ったのは、“トラフィックチルドレン”のことです。安田さんの「自分の体に値札がつくということを想像できますか？」という言葉がすごく心に刺さりました。（1年生）

◎私は安田さんの話を聞いて、安田さんの気持ちが写真からあふれてきて、特に震災であったあの一本松の木の意味がよくわかって、一本松を間近で見てみたくなりました。（1年生）

◎ココナッツおじさんのようには足を失っていないけど、ココナッツおじさんのようには楽しめてない。あと、自分がなぜこうしたかとあまり考えていなかったので、それをこれから意識してやりたい。（1年生）

◎カンボジアの人々やあおい君、ふみや君は、今こうして文を書いている間にも生活しているんだなと思いました。（1年生）

◎一本松の写真を撮って、義理のお父さんに見せた時のお父さんの言葉を自分勝手に解釈してみたら「お母さんを震災で亡くして、そして余震でまた津波が起きた時、安田さんを続けて失くしたら」というお義父さんの気持ちだと思いました。（1年生）

◎足を２本失っても奥さんのために生きる。自分から守りたい人を守れる人に。そんな人に私はなりたいと思いました。そんな守りたい人を見つけることもすごく大変なことだけど、それを自然にできている人たちの凄さを感じました。（3年生）

◎私はまだ知ることしかできていない。自分には何ができるのか、自分で見つけたいと思います。傷ついた子どもたちが、何を残そうと、託そうとしているのか。安田さんのお話を聞かせていただいて、今の自分は本当に知ることしかできていないなと思いました。ここ最近、北朝鮮の核のことや様々な報道を見たり聞いたりすると、同じような胸がしめつけられるというか、つまるような心持ち、感覚がして、何かしたい、しなければならないという責任感、使命感を感じることがあります。高校に上がってからも、その感覚、気持ちを忘れずに知って動ける高校生になりたいです。（3年生）

◎かわいそうとか悲しいとか、痛そう、つらそうなんて言葉はそんなかんたんに出してはいけないようなそんな話だなと深く思いました。この気持ちをどう説明すればいいかわからないと思った時、安田さんもこんな気持ちだったのかなと思った。安田さんの声がもっといろんな人に届くようにいつか私も手伝いたいなと思いました。（3年生）

21世紀を生きる君たちへの期待

菅谷 昭さん（元医師、単身ベラルーシに医療支援に。現松本市長）

1943（昭和18）年長野県生れ。信州大学医学部卒。医学博士（甲状腺専門）。1991（平成3）年より、チェルノブイリ原発事故被災地の医療支援活動に参加し、現地を7回訪問。1995年末に信州大学医学部第二外科助教授を退官。翌年1月からボランティアでベラルーシに単身滞在。5年半にわたり、首都ミンスクにある国立甲状腺ガンセンターとゴメリ市の州立ガンセンターで甲状腺ガンにかかった子どもたちの治療にあたった。帰国後、長野県衛生部長を経て2004年から松本市長。

11月8日(水)、菅谷昭松本市長がお忙しい中、3年生のために明星学園にやってきてくださいました。体育科の高橋教諭が保健の授業で扱ったNHKの『プロジェクトX挑戦者たち』「チェルノブイリの傷 奇跡のメス」、そこには大学病院での安定した地位を投げ捨て、単身チェルノブイリ原発事故で飛散した放射性物質の大きな被害を受けていたベラルーシの町で医療支援活動を続ける菅谷さんの姿がありました。彼の甲状腺がんの高度な手術技術や、常に患者の立場に立って接する姿に、若い現地の医師たちは心打たれ、彼を慕い、彼から様々なことを学び始めます。それだけではありません。彼は、がんの再発に不安を感じる患者たちの家を一軒一軒訪ね、診察を続けるのです。

日本に戻られ、医師という立場から、現在松本市長として活動されている菅谷さんに是非会いたい、菅谷さんを子どもたちに是非とも出会わせたい、その思いがなんと実現してしまったのです。菅谷さんからは事前にこんな明星生へのメッセージをいただきました。

21世紀を生きる君たちへの期待

君たちにとって「地球市民」として生きる新しい生き方は、それぞれ自分自身で創っていくべきだと思います。そして、そのためには時代に流されることなく、時には勇気を持って立ち止まり、もう一度自分を見つめ直すことも必要です。しかし、考えるだけで行動を起こさなければ何も生まれません。まず第1歩を踏み出してください！　今、改めて21世紀を生きる君たちにエールを贈ります。

「人生や人の生き方に教科書はありません」

勇気ある行動と創造に向けての努力によって、「机上」のではなく、「人間社会」のエリートになってください。地球規模の視野に立ち、人類の平和に役立つ生き方や活動に関心を深めてくださることを期待しています。

（松本市長　菅谷　昭）

特別授業で菅谷さんは、少年時代から聖路加病院での日野原先生との出会い、信州大学での研究活動、そしてチェルノブイリでの医療支援活動、ご自身の経験の中から感じ、行動してきたことを語ってくださいました。

「自分の人生に納得して死にたいと思ったんです。納得して死ぬということは、納得して生きるということです」

言葉も通じないベラルーシの町で、『地球市民』という生き方を意識されたという菅谷さん。「僕を必要としている場所が、こんなところにあったんだ。……人間には誰かの役に立ちたいという気持ちが必ずある。……その時大切なのは相手の立場に立って考え、そして行動すること」。

最後に菅谷さんから３年生に、こんなエールが贈られました。「自分は必要とされている人間なんだという自己肯定感を持ってほしい」「自らの個性を大切にして、それを生かしてほしい」「人の上に立つ人間になる前に、人を支える人間になってほしい」

３年生は授業後、たくさんの感想を書いていました。個性を尊重するだけではなく、それを誰かのために社会のために生かすことの大切さ。考えるだけではなく、ほんの一歩だとしても行動することの大切さ。自分自身の将来について漠然とした不安を抱える中学３年生という時期の彼らにとって本当に大きな勇気をいただいた１時間となりました。

そこに込められていた深い意味

アーサー・ビナードさん（詩人・俳人・随筆家）

1967年、米国ミシガン州生れ。コルゲート大学で英米文学を学び、来日と同時に日本語で詩作をはじめる。2001年、詩集『釣り上げては』で中原中也賞、2005年に『日本語ぽこりぽこり』で講談社エッセイ賞、2007年には『ここが家だ―ベン・シャーンの第五福竜丸』で日本絵本賞を受賞。詩集に『左右の安全』、絵本に『くうきのかお』『さがしています』、翻訳絵本に『ダンデライオン』、エッセイ集には『出世ミミズ』『空からきた魚』『日々の非常口』『アーサーの言の葉食堂』などがある。

2014年の公開研究会の全体会の講師として私たちはアーサー・ビナードさんを明星学園にお招きしました。そのとき会場で彼の講演を聞き、衝撃を受けた中学生がいました。「この話は明星生にこそ聞かせないともったいない！ぜひまた来てください！」その生徒は、その場で何度も訴えていたそうです。もちろんそんな思いを持ったのは彼女だけではありませんでした。今回、「へいわのたねをさがす明星学園の会」が中心となり、アーサー・ビナードさんの特別授業が6月4日の日曜日、実現しました。集まったのは小学校4年生から中学校3年生までの36人です。

写真絵本『さがしています』、宮沢賢治の『雨ニモ負ケズ』。「味噌と少しの野菜」、「少し」ってどのくらいの量なのだろう？　「ちがう言葉に翻訳しようとすると、そこにこめられていた深い意味が見えてくるんだ」。「小さな茅葺の小屋」、「小さな」ってどのくらいの大きさだろう？人によって、時代によって、地域によって異なる感覚。本来、揺れているはずの言葉を固定的に決めつけて考えてしまっている自分にハッとさせられます。「駆け付ける」の意味とニュアンス。「駆け付け警護」、平和の問題。東に病気の子供あれば / 行って看病してやり / 西に疲れた母あれば / 行ってその稲の束を負い / 南に死にそうな人あれば / 行ってこわがらなくてもいいといい / 北に喧嘩や訴訟があれば / つまらないからやめろといい。「東～・西～・南～・北～、この中にひとつだけ文法的に違うものがあるんだけどどれでしょう？」生徒がいろいろ答えていきます。一つの言葉、助詞の使い方ひとつか

ら、詩の世界が広がっていきます。なるほどとうならされます。どうやって喧嘩をとめるか？

最後にアーサーさんが読んでくれたのは、今年３月 11 日に刊行された絵本『ドームがたり』。原爆ドームの立場に立って物語るときに感じる違和感。本来、特殊な一つの原子の中の原子核が分裂する現象を「原子爆弾」と命名することへの違和感。『ピカ』という言葉を使う人と『ピカドン』と言う人の違いは何か？　小学４年生と中学３年生が同じ場所で授業を受けています。

知識を問うのではなく、何を感じ、いかに考えるかを問うからこそ、多様な年齢の子どもがいても不思議と違和感がありません。むしろだからこそ楽しかったとも思います。

質疑応答では、生徒から次のような質問が出ました。

「日本語を覚えようと思ったきっかけは何ですか？」「絵本をつくることになったきっかけは何ですか？」「さっき、アーサーさんがぼくたちにした質問ー『雨にも負けず』の、『そういうものに私はなりたい』アーサーさんはそういう人になりたいですか？」。

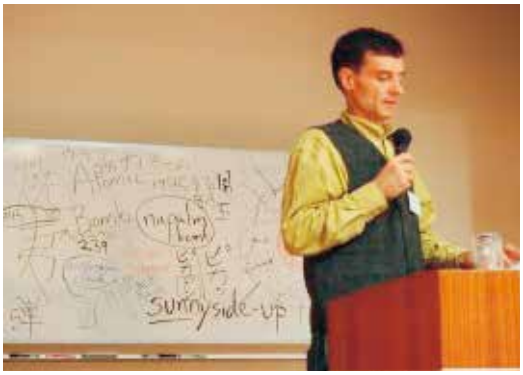
その一つ一つに本当に丁寧に答えていただきました。いつのまにか３時間たっぷりの授業になっていました。それだけではありません。その後一緒にお弁当を食べながら、さらにお話をさせていただいた子どもたちもたくさんいたようです。

2014年度公開研究会全体講座
「なにを勉強したら生きのこれるのか」

今年の小中公開研究会、全体講演は、詩人のアーサー・ビナードさん。いちょうのホールには座りきれずに、壁際にずらっと人が並ぶほどの大盛況となりました。「ことばはレンズである。英語のレンズで見ていたとき見えなかったものが、漢字を学び、日本語を話すようになった時に見えてきた。新しい発見があった。・・・」ご自身の体験をユーモアたっぷりに話し始めてくれました。

「言葉を教えるというのは本当に大切。技術を教えることも大切。でも、そのことによって見えなくなるものがある。世界を狭めてしまうことがある。本当に大事なことはことばのむこうにあるものに、思いをはせること。・・・」広島や長崎の問題がアメリカの教科書ではどう教えられているかという話がありました。自由で正義の国アメリカが、原子爆弾によって戦争を終わらせ、両国の戦死者をそれ以上増やさなかったという構図。それがあたりまえのこととして信じられていたこと。アーサーさんは日本語を学び、日本語のレンズでそれをながめ、原爆の落とされる数か月前の東京大空襲のことを知ったとき、さまざまな疑問がわいてきたといいます。

それを一つ一つ調べていくうちに、気づいたそこに隠れていた欺瞞。「なぜ東京の中枢ではなく、一般庶民の住んでいる下町に、それもわざわざ逃げ場のないように焼夷弾を落としたのか？」「なぜわざわざ戦争を長引かせるようなことをしたのか？」地図を見ることの大切さ、その場所に足を運ぶことの大切さを語ります。



広島の人はだれ一人『キノコ雲』などとは言わないそうです。「私が日本に来た当時、出会った広島の被爆者はみんな『ピカ』というんです。『ピカドン』という人もいました。東京の人はそんな言葉を使ってはいなかった。それは原爆にどこであったかの違いなんです」。爆心地付近にいた人。そこから数キロ離れたところにいる人。そんな地獄の中にいる人が『キノコ雲』など見ることができないこと。きれいな『キノコ雲』を見ることができるのは、地上で何が起きているか想像することすらできない「エノラ・ゲイ」の乗組員の眼から見たことばであること。

「どのことばを使うかによって、無意識のうちに立ち位置が決まってしまうんです」。「ベトナム戦争の時、それまで使われていた『焼夷弾』ということばが日本の新聞から消え去り、『ナパーム弾』ということばに取って代わったのはなぜか？」

ことばの大切さと、怖さ。それを自覚した上でのことばの教育。時に違うレンズでものを見ることの重要性。いったん自らのレンズを外してみることの勇気。これは国語教育のみならず、英語、社会科、全ての教科に共通する重要な問題意識です。社会科の分科会でも、話題になったようです。「鎖国と開国」。あたりまえのように使われている歴史用語。この言葉の使い方に疑問を投げかけた３年生がいたようです。それを社会科の教師はどうさばくのか？　研究会もまた同じです。だれもが自分のレンズを持っています。研究するということは自分のレンズを確固としたものにすることでもあります。それをいったんはずしたとき、何が見えてくるのだろう？　別のレンズに掛け替えたとき、どんな疑問がわきあがってくるだろう？　それができてこそ自分の世界を広げてくれる意味のある研究会になるのではないかと思います。だれもが自分のレンズには無自覚です。だからこそ、教員全体でアーサー・ビナードさんのこの日の講演を聴けたことは大きな喜びでした。

世界で今起きていること

ダグラス・ラミスさん（政治学者・「世界がもし100人の村だったら」監修）

サンフランシスコ生まれ。政治学者、評論家、平和運動家。1960年に海兵隊員として沖縄県に駐留。1961年に除隊後、関西に住み、日本での活動を始める。1980年津田塾大学教授、2000年退職後、沖縄に移住。著書に『普通の国になりましょう』（大月書店）、また『世界がもし100人の村だったら』（マガジンハウス）を監修するなど精力的な活動を続ける。

4月21日(金)13:30～15:20、いちょうのホールに政治学者のダグラス・ラミスさんを招いて、3年生の特別授業が行われました。『世界がもし100人の村だったら』(共著)、『普通の国になりましょう』『中学生の質問箱　戦争するってどんなこと?』ほか、若者に向けた著作も多く、ユニークな視点から鋭い考察で多くの人を魅了してきた政治学者、平和活動家です。今回は、『世界で今起きていること、そして＜わたし＞とのつながり』と題し、3年生を対象に特別授業が行われました。

「今日は結論のようなものを言うつもりはありません。みなさんが悩むためのお話をしようと思う」というところからラミスさんの語りが始まりました。憲法9条という不戦の誓いをしている国は世界で日本だけであること。国家には戦争をする権利があるというのが世界の常識であること。日本を「普通の国」（戦争のできる国）にした方がいいという考えの人たちもいるということ。

交戦権を放棄する憲法9条に国民の過半数である60％が賛成しているにもかかわらず、日米安保条約（米軍基地を日本におく）に賛成している国民が87％もいるという事実をどう考えるか？軍事力を持つことを否定しながら、アメリカの軍事力に依存することの矛盾。この矛盾をどう解決するか。その解決策の一つが、基地を地理的にも文化的にも遠い沖縄に集中させることだというラミスさんの指摘。「そのことでヤマト本土の人間はその矛盾について日常、意識しないですむのではないですか？」思考停止。想像力をもって考えることの大切さ。

沖縄の面積は日本の国土の 0.6％に過ぎないにもかかわらず、日本にある米軍基地の 74％が集中しているという事実。これは反戦平和を主張するためのデータではなく、「不平等・沖縄への差別」を伝えるための数字だとおっしゃいます。ラミスさんからは生徒に自分のカバンを会場まで持ってくるようにという事前の指示がありました。壇上に上がった指名された沖縄役の生徒一人のもとにたくさんのカバンが集められ、肩や首にかけられていきました。もちろん途中でギブアップです。見たくないもの、欲しくないものを遠くに押し付け、意識しないでいることを可視化するパフォーマンスでした。

「中学生である私たちにできることは何ですか？」という生徒の問いに、「勉強すること。（矛盾を抱えている）問題から逃げないで、直面して考えてほしい。それが本当の勉強。考える人間になること。私の考えはあるが、結論を出すのが今日の目的ではない。異なる意見であっても、なんで自分がそう思っているか相手に伝え、伝えた以上相手の考えもしっかり聞き、なるほど思える部分はしっかり受け止める、そんな議論できる文化が必要」

前もって生徒からラミスさんへの質問が集められ、それがラミスさんのもとへ届けられていました。

「ありきたりではない面白い質問が多かった」とおっしゃっていただきましたが、あっという間に 2 時間が過ぎてしまい、質問コーナーが少なくなってしまったのが残念でした。授業の後、生徒は授業の感想文を書いているようです。

彼らが何を感じていたのか、ラミスさんが示してくれた「悩むための材料」をどう受け止めているか、楽しみに読もうと思っています。

最後の写真は、この授業のために事前の準備、司会等を担当してくれた生徒スタッフの面々です。

2017年2月22日

海ってなんだろう

植原量行さん（東海大学海洋学部海洋地球科学科教授）

1967年9月22日京都生まれ、九州育ち。北海道大学大学院水産学研究科博士課程終了。博士(水産学,北海道大学)、科学技術庁特別研究員、水産庁水産研究所研究員を経て、現在東海大学海洋学部海洋地球科学科教授。専門は海洋物理学。

2月22日（水）、I年生は5時間目のLHRの時間を使い、いちょうのホールで特別授業を行いました。講師は東海大学海洋学部海洋地球科学科教授の植原量行先生です。ご専門は「海洋物理学」。理科の加藤教諭の大学院時代の恩師でもあります。この日のテーマは、「海ってなんだろう」、サブタイトルは「豊かな自然がなげかける謎」。私たちがふつうイメージする「海」とは全く違う視点からの刺激的なお話でした。

「海って何だろう？　われわれが海だと思って見ているものは、大気と海との境の部分です」。海の体積を図るために、新聞紙を地球儀の海の部分に張り付け、それを固く丸めるといった直感的な方法を試し、また数学的に海のすべてを表す方程式を紹介してくれたりもしました。「水の量は意外なほど少ないんです。でも、

その海はゆっくりとした変動を作り出します」。

最後に先生は、「豊かな自然が投げかける謎に気づかぬまま大人になってはいけない」というメッセージをI年生に残してくれました。その後の質疑応答で、ある男子がこんな質問をしました。「先生はどういう目的をもって、海の研究をしているんですか？」それに対する先生の答えです。「う〜ん！大学の先生をやっているとやっぱり定期的に論文を書いたりしないといけません。でも、何かのためにとか計画を立ててとかそういうのは好きじゃない。目的をもって研究をしているのではなく、わからないことを楽しんでいる、そうすると何か面白いことを発見する、そういう感じです」。

本来の学びって、こういうことなのではないか、やさしい言葉でありながら深い言葉だな、

そしてうらやましいな、そんな感想を持ちました。

ピアニストって何？音楽の魅力に迫る

雨宮彩葉さん（ピアニスト）・AYUKOさん（ボーカリスト）

雨宮彩葉さん（ピアニスト）
2011年3月国立音楽大学演奏学科鍵盤楽器専修卒業。同時に演奏応用（ジャズ）コース終了。現在は自己リーダーバンド「AYAHA Trio」でのライブの他、ジャズライブ、レコーディング、ミュージカル、作編曲、講師、文化庁学校公演など様々な場所に活動の場所を広げている。

AYUKOさん（ボーカリスト）
中学卒業後単身留学。カナダでジャズピアニストPeter Taylorのグループに参加し、ヴォーカル活動を行う。帰国後、和太鼓奏者として長野オリンピック、ニューヨーク同時多発テロ・チャリティーコンサート・イン・セントラルパークなどに参加。2006年、都内各所ライブハウスで本格的に活動開始。和と洋のリズムを兼ね備えた異色のボーカリストとして全国を回り精力的に活躍中。

2月15日（水）、1年生は5校時のLHRの時間を使って、音楽の特別授業『ピアニストって何？〜音楽の魅力に迫る〜』を受講しました。ピアニスト雨宮彩葉さんとボーカリストAYUKOさんの、なんともお洒落で軽妙なトーク、音楽との出会いからジャズを通して感じる「自由」の厳しさと素敵さについてのお話まで、あっという間の50分でした。そして披露していただいた3曲の演奏、歌唱に会場全体が魅了されました。

「音楽の講演会」と話をもらった時に、堅苦しい講演よりも生の音楽に触れてもらいたい。そして、あまり馴染みのない新たな音楽に出会ってもらいたいと考えました。そしてひらめいたのが“Jazz”。楽譜通りに演奏するのが音楽のすべてではなく、型にはまらない自由な音楽がJazzの魅力です。しかし、自由であると同時に、自分の出す音には責任があるという言葉がありました。まさしく明星学園の理念と通ずる部分があるなと思いながら、楽しい時間を過ごしました。生徒にとっての視野を広げる良い機会になったならばこの上ないことです。

講演の中で心に残ったことば
――生徒の感想より
音楽の中で人々との出会いがある
自由な音楽でうそはつけない
自由には責任がある。人に合わせるのではなく自分自身！
一人一人が目標を達成することで良い演奏になる
みんなに合わせるよりも、「自分がこうしたい」と思う目標を達成したらいい
歌は国境を越えて楽しめる
Jazzは自由な音楽♡
日本の音楽も好きだし、洋楽も好きです
やりたいと思う気持ちは止められない
いろんな人と出会うことが楽しい
アイディアは楽観的に、計画は悲観的に！
生徒の感想――
◎とにかく、かっこいいー！すごいなと思った、本当にー！あこがれます。これからもがんばってください！！
◎『春よ来い』は大好きな曲だったので、終始鳥肌がたっていました。すごく素敵なアレンジで、いつものバージョンよりも甘酸っぱくて、自分の心の中の心情変化がすごく分かりました
◎AYUKOさんは和太鼓をやっていて、和太鼓にも即興のパートがあったり、ボーカルにもあると

いう共通点を知った
◎今日初めてJazzを聞いて、自分の好きなリズムがたくさんあり、自分に向いているかもと思いました。音楽は無限にあり、楽しそうだとあらためて知りました。
◎とても刺激的で多くの気づきのある、なんとも贅沢な特別授業でした。

合唱ワークショップ

早稲田大学男声合唱団 Chor Flügel

早稲田大学を本拠地として活動している大学男声合唱団。NHK全国学校音楽コンクール課題曲紹介番組に毎年出演。全日本合唱コンクールでは、過去15年間で8回全国大会に出場し、2016年には都大会金賞・全国大会金賞受賞の実力派男声合唱団。

2月15日(水)に早稲田大学コール・フリューゲルの皆さんを招いて、“合唱ワークショップ”を行いました。4時間目は3・4年生を対象に、5時間目は2年生を対象に合唱ワークショップを、昼休みには“花*花ミニコンサート”を開催しました。「コール・フリューゲル」という名前はドイツ語で“歌う翼”を意味します。

2016年に行われた全日本合唱コンクール全国大会では金賞を受賞、毎年放送されるNHK番組「課題曲を歌おう」にも出演している実力派の男声合唱団です。 早稲田大学を拠点に活動する合唱団で、私が以前この団体に所属していたことがあり、今では彼らにボイストレーニングをしていることから今回のモデル合唱団をお願いしました。 3・4年生の授業では、まず始めに合唱団に「早稲田大学校歌」を歌ってもらいました。声を聞いた瞬間に子どもたちは目がキラキラ！耳をダンボにして聴き入ってました。大学生が子どもたちに混ざり、発声練習を行いましたが子どもたちはもう大興奮!!大学生が散らばる時には、「こっちこっち！」「こっち来て〜」とお誘いの嵐でした。次に『世界に一つだけの花』の音取りをみんなで行いました。難しい音程やリズムも大学生の歌声を聴き、一生懸命真似しながら歌っていました。そして最後に各学年の歌の発表を行いました。3年生、4年生の元気いっぱいな透き通るような歌声にフリューゲルのみなさんも感激していました。フリューゲルの皆さんには、音取りしたての『世界に一つだけの花』と『花は咲く』を歌っていただきました。自分たちだけで歌う『世界に一つだけの花』とはまた違った、男声合唱の魅力

に感動しているように思いました。演奏後、合唱団が退場し楽屋に戻る際には、子どもたちから握手を求めるなど、興奮冷めやらぬ様子でした。

お昼休みに行われた『花＊花ミニコンサート』では、『早稲田大学校歌』、『世界に一つだけの花』、『花は咲く』を演奏しました。小学生から中学生まで、そして先生方もたくさんいらしていただき、小学校の音楽室はいっぱいになりました。普段あまり聴きなれない男声だけの合唱に心奪われた方も多かったのではないでしょうか。

演奏後には「感動した！」「もっと聴きたい！」という声もあり、大盛況でした。

2年生の合唱ワークショップは、合唱団に楽譜を渡すところから始め、40分のうちに音取りからどこまで楽曲を深めるところまで出来るかの挑戦をしました。私の働きかけによって合唱がどのように変化していくかを生徒たちに見てもらいました。あれよあれよと変化する歌声に生徒は驚きを隠せなかったようで、必死にメモを楽譜に書き留める生徒や、大学生の顔を凝視する生徒など様々でした。 今回、早稲田大学コール・フリューゲルの皆さんを招いてワークショップをやろうと思ったのにはある理由がありました。それは中学校の合唱コンクールまで残り1週間!! どうしたら子どもたちに歌う楽しさや、楽曲を深める喜びを感じてもらえるか、考えたからです。生徒の中には歌うことが

苦手な生徒、なかなかやる気が起きない生徒がいます。そんな生徒に大学生の一生懸命歌っている姿、そして歌を楽しんでいる姿を見て刺激を受けてもらいたいと思いました。 今回、来てもらった合唱団は全員が歌うことを楽しんでいます。そして何よりも、14人の一人一人が責任感を持ち、自分のパートを支え、一生懸命合唱を作り上げています。なぜなら、一人が力を抜くだけで、ハーモニーは一瞬にして崩れるからです。クラスでの合唱においても同じです。歌わなくていい人なんて1人もいません。やる気があるかないかの話ではなく、みんなと協力して作り上げなくてはいけないと思います。きっとみんなと協力して何かを作り上げる楽しみや、何かをやり遂げる達成感をこの合唱コンクールで味わうことができたと思います。 今回のワークショップで、子どもたち一人一人が歌うことに興味を持ち、合唱を楽しみたいという意欲が少しでも湧いたら大成功だったと思います！

2017年2月8日

アイヌの文化を学ぶ

ヤイレンカ（アイヌ女性ユニット）

関東在中のアイヌ文化伝承者で結成された歌、ムックリ、踊りのユニット。「ヤイレンカ」はアイヌ語で「喜ぶ」という意味。昔のおじさん、おばさんの時代の古い歌を掘り起こし、アレンジし紹介している。

2月8日（水）、2年生は5校時のLHRの時間を使い、「この人に会いたい」企画として北海道の先住民であるアイヌの方々をお招きしました。お越しいただいたのは、主に歌・踊り・ムックリ（アイヌの楽器）を通してアイヌ文化を伝える活動をしている女性グループ「ヤイレンカ」4名の皆さんです。2年生は今年の夏、修学旅行で北海道を訪れます。事前学習の一環でもあります。

雑誌名の『ノンノ』は、アイヌ語で「花」。『カムイ』は「神」で、『レラ』が「風」。北海道の地名の終わりにつくことの多い『ベ・ベツ』は「川」。日本語になっているアイヌ語が意外に多いということからお話は始まりました。民族衣装や食事について。言葉を奪われたこと、アイヌの文化を残そうと学習し、活動している人たち。そしていまだに残っている差別。「アイヌの人は北海道だけに住んでいるんではないんです。関東だけでも数千人のアイヌの人が暮らしています。アイヌの人だけではありません。私の住んでいる大久保には韓国の人、中国の人……」。

お互いを尊重し、共存していくことの大切さ。グローバル社会が叫ばれる今、海外へと目が向きがちですが、その前提として内なる多様性を感じ取ることの大切さに気づかせてもらえた貴重な時間となりました。

夢を叶える

沙央くらまさん（元宝塚歌劇団・卒業生）

2001年、宝塚歌劇団に入団。雪組、月組を経て2014年から専科へ異動。「ベルサイユのばら－オスカル編－」で新人公演初主演。「エリザベート」で新人公演主演。「雪景色」で主演。2018年、『ひかりふる路(みち)～革命家、マクシミリアン・ロベスピエール～／SUPER VOYAGER！－希望の海へ－』東京公演千秋楽をもって退団。本校卒業生

12月1日の木曜日、卒業生であり宝塚歌劇団で活躍している沙央くらまさんが明星学園に帰ってきて、中学生全員を前に『夢を叶える』というテーマでお話をしてくれました。会の半ば、在校生の歌も聞いてもらおうということで中学生全員で『空も飛べるはず』を歌いました。その後のことです。

「感想言っていいですか？これじゃ、全然空飛べないよ！中学生という時期はいろんなことが気になってなかなか自分を出せない。それはわかる。でも、もっとパワーだそうよ。苦手だと思っても、まずやってみる。思いっきりやってみなければ、本当に苦手かどうかだってわからない。苦手だと気づいたからこそ始まることだってある。……明星学園は、自由と向き合う機会を与えてくれる学校だよ。自分が好きなことを好きって言えるのが自由だよ」

率直な、愛情のあるとても熱いメッセージでした。当初予定になかったものの沙央さんの計らいで聞かせてくれたのが、『ベルサイユのばら』のテーマ曲でもある「愛あればこそ」、宝塚歌劇団の代表歌でもある『すみれの花咲く頃』。迫力ある歌声でした。教室に戻った生徒たちには、沙央さんへのメッセージを自由に書いてもらいましたが、それを読むにつけ彼女のことばと歌声に心を揺さぶられていた生徒が多かったことがわかります。放課後も、特に深い話を聞きたい生徒にということで、沙央さんには40人近い生徒が集まる視聴覚室に来てもらいました。そこでの、緊張しながらも目をキラキラさせながら自分を語り、質問する中学生。なんとも贅沢で豊かな時間を共有できたという余韻の中、会を終えることができました。

●2年男子／明星学園の「自由」の意味が少しわかった気がします。自信を持つこと、実行することが大事ということを教えてもらいました。今回の特別授業、人生につながるいろんなことを学べたと思います。

●2年男子／沙央くらまさんがとても明るく、自分を素直に出していたし、おもしろかった。音響のトラブルなども笑いに変えていたのがすごかった。もちろん歌もすごいけど、女性なのにとても男らしく、美しかったのにさらにすごく驚きました。明星学園もすごいけど、宝塚もすごいんだなと実感しました。これからも体調に気をつけてがんばってください。

●2年男子／学んで伝えることの大切さがよく分か

りました。楽しかった。ありがとうございました。これから超頑張ります。熱い心、最高です。

●3年女子／自分の好きなこと、やりたいことに全力で打ち込んでいる人はここまでかっこいいだなんて。夢の話、本当に助かりました。何事も動かなければ始まらないこと、しみじみと実感しました。私もやりたいことだけでなく、いろいろなことにチャレンジし、いつまでも夢を追い続けるかっこいい女性になりたいと思いました。またいつか、機会があったらお話を聞かせていただきたいです。絶対に観に行きます！！

●3年女子／合唱は、合唱コンクール・卒業式に向けてアドバイスをいただいたよう、ひとつになって歌が歌えるようこれから作っていきたいと思います。私も沙央さんのように、卒業してからそのときの在校生に、ステキな人だな、明星生でよかったなと思ってもらえるような人になりたいと思いました。ものすごく、ため息が出るほどかっこいいと思ってしまったので、どうにかして一度舞台を見に行きたいと思いました。

落語の授業

柳亭小痴楽さん（落語家・卒業生）

明星学園卒業生（75回生）。5代目柳亭痴楽の次男。平成21年二ツ目昇進、三代目小痴楽となる。平成23年、第22回「北とぴあ若手落語家競演会」奨励賞受賞。

11月15日（火）3～4校時、柳亭小痴楽さんを招き、1年生を対象に落語の授業をしていただきました。小痴楽さんは明星学園の卒業生(75回生)、1年生にとっては先輩にあたります。先月、NHK『新人落語大賞』という若手落語家の登竜門とされる大きなコンテストがありました。東西プロの落語家100数十人がエントリーしたこの大会で、小痴楽さんはなんと予選を勝ち抜き、最終5名の一人として大賞を目指す本選に登場、その模様がNHK総合で放映されたばかりです。現在、落語会期待の星と目されています。

この日は、初心者の人が落語を楽しめるように、知っておきたい知識をまず教えてもらいました。太鼓の音の意味、座布団、扇子と手ぬぐいの使い方、小咄。実際に生徒を舞台に上げてのやり取りで、笑いが起こります。そのことを知った上での『まんじゅう怖い』、生徒たちもその技の確かさに気がついていたようです。そして質問コーナー。次から次へと手が挙がります。話は落語のことからどのようにして落語家になったのかといった小痴楽さん自身の問題へ、そして明星学園時代の先生のなつかしい話……。あっという間の2時間でした。

1年生の感想より――

●太鼓にそんな意味があるんだと思ってびっくりしました。これから寄席に行って落語を見るとき、太鼓の音の意味とか文字の”すみのすみずみまで”とか意味が分かるともっと楽しく面白く落語が聞けるなと思いました。物を使うのも、扇子と手ぬぐいだけなのに本当にそばを食べているみたいに見えて、そういう方法も教えてほしいな～と思いました。私はすごく落語が好きで、おじいちゃんと一緒に車の中などでよく聞いています。今日の『まんじゅうこわい』は、何度も聞いたことのある話なのに、全然違っていて、小痴楽さんフィルターを通して聞けてすごく楽しかったです。落語家の人の、「あー」とか「えー」とか話している途中に言うのがすごく好き。すごく面白かった。若手の大喜利は見たことあるけど、古典落語も見に行き

たいです。これからも頑張ってください。応援しています。

●とても面白くて、今度は寄席と呼ばれるところまで見に行きたいと思いました。また、質問タイムで出た話にはたくさん興味を持つことが多く、小痴楽さんの生き方がカッコイイと思いました。高1まで勉強をして、その後は修業に出るってすごいと思うし、度胸があると思いました。落語家さんはその場に応じて対応しなくてはならないし、でも小痴楽さんは動揺もせず、その対応力すごいと思いました。あの2時間で落語家さんに興味を持ちました。できることなら今回の講演を一番前で見たかったです。落語家さんは沢山のことができなくてはいけないんですね。これからも沢山の方に素敵な落語を語ってください。いつか見に行きます。明星学園のほこりです。

●今日はとても面白い落語を教えてもらってよかった。落語のこと、ぼくは今まで何もわかりませんでしたが、これからはテレビの笑点などももっと面白く見ることができそうです。

●『まんじゅうこわい』や桃太郎の話など、読むだけでなく、それを演じることで面白く見せることができるのだと思った。小痴楽さん、これからも頑張ってください。

2016年10月13日

着物の授業

佐藤節子さん（着物染織家）

1963年　染色家の父、腰原新一氏急逝後、女子美在学時代より工房を継承。1977年、株式会社あらたを設立し、創作を得意とする独自な作品を作り続け、東京友禅の着物染色家として活躍しながら現在に至る。

来月の『職場体験』を前に、2年では『あの人に会いたい！』企画を昨日、ホームルームの時間を使って持つことができました。お越しいただいたのは着物染色家の佐藤節子さん。東京友禅の着物染色家としてオリジナル作品を世の中に発表し続け、そのかたわら着物についてのコラムやエッセーなど、着物の持つ素晴らしさを様々な活動を通して発信し続けておられます。

「着物について語ることは、日本の文化について語ることなんです。お茶、絵柄、自然、日本の四季……」。子どもたちにとって日常なじみの薄い「着物」を入り口に、本来私たちの身の回りにある、それでいてほとんど意識せぬままやり過ごしてしまっている大切なもの。その一つ一つが重要な意味のあるものとしてつながっていることを感じます。

絹（シルク）がどれだけ貴重で最高の素材であるか。養蚕、シルクロード……。木工・工芸・社会の授業などで耳にしていた用語が、別の角度から光を与えられたように感じた生徒も多かったのではないでしょうか。なぜ成人式に振袖を着るのか？　大人になるとは？

国際化が叫ばれ、4年後の東京オリンピックを見越しつつ、果たしてわれわれ日本人はどれだけ自分の文化を知っているのだろうと不安になります。海外の人に語れるものを持っているのだろうか。昔からある日本の文化が古くさいものなどではなく、現代の様々な文化に脈々とつながり、また常に新たな展開を生むエネルギーを持っているということを、凛としたたたずまいの佐藤さんのお話をうかがいながら再認識させられました。

ご興味のある方は、是非佐藤さんが運営する東京手描友禅の着物工房『あらた工房』のHPをご覧ください。

ata Atelier
www.arata.

被爆者の声を聴く

小谷孝子さん（被爆体験腹話術証言者）・渡辺里香さん（ピースボート）

小谷孝子(被爆体験腹話術証言者)
6歳の時に広島の自宅で被爆。奇跡的にかすり傷で済んだものの、4日後に4歳だった弟さんを、5年後には母親を亡くす。母を亡くしてから被爆者であることを隠してきたが、2005 年ごろから、腹話術の人形「あっちゃん」を使った被爆証言を行っている。

渡辺里香(国際NGO「ピースボート」インターナショナル・コーディネーター)
年に3回地球一周の船旅を企画運営するNGO「ピースボート」にて、洋上の平和・環境・文化プログラムを開催したり、寄港地で文化交流や検証ツアーを行う。特に世界各地に被爆証言を届ける「おりづるプロジェクト」を手がけている。

5月18日(水)、2年生はLHRの時間を利用し、全員がイチョウのホールに集まりました。今日お招きしたのは、広島でのご自身の被爆体験を腹話術で証言し続けている小谷孝子さん。小谷さんは5歳の時、戦争でお父さんを失い、6歳の夏、8月6日に広島で被爆します。意識のなかった弟さんはその4日後に突然目を醒まし「飛行機おそろしいね。お水おいしいね」の一言を残し、亡くなりました。お母さんもまた彼女が6年生の時、原爆症による白血病で亡くなりました。それ以後、小谷さんは長い間ご自身の体験を隠してきたというのです。自分だけ生き残ってしまったという罪悪感を感じながら。

しかし、今から12年前のある大切な出会いによって彼女は語り始めます。6歳の時亡くなった弟のあっちゃん（腹話術のお人形）と一緒に。そんな小谷さんは昨年、ピースボートが主催する世界23か国を巡る船旅に参加、世界でご自身の体験を語ってきました。その活動をコーディネートしていたのが、ピースボートのスタッフ、渡辺里香さん。この春から英語科の先生として迎えた高山教諭も、これまでピースボートで様々な活動をしてきていました。そんな人と人とのつながりが、今回の特別授業を実現させてくれました。

国を超えて、世代を超えて平和を願う小谷さんの思いが伝わってくるやりとりでした。来週にはオバマ大統領が広島を訪問します。マスコミはどんな報道をするのでしょう。今日の話を聞いた子どもたちはそれぞれ素直で素敵な感想を書いていました。ニュース番組を見ながら何をつぶやくのでしょう。その時、そばにいる大

人がどんな言葉をかけられるのか、あるいはあえて軽々しい言葉をかけないようにするのか。試されるのは我々おとななのかもしれません。

追記：小谷さんのお話を伺いながら、一昨年の公開研究会の折り、全体講演でお話しいただいた詩人のアーサー・ビナードさんのことを思いだしました。原爆が戦争を終わらせるための正しい行為だったと当たり前のこととして学生時代に教育を受け、日本にやってきたビナードさん。しかし、にほんごを学び、広島に出会い、被爆者の方々と出会いながら思考を深め、豊かな感性で感じとっていったこと。そんな話を小谷さん、渡辺さんにしたところ、「ピースボートの船で、ご一緒したんですよ。素敵なお話でした」。ここでも、つながりました。不思議です。是非、ビナードさんの講演を報告した「中学校ニュース」を併せて読んでいただければと思います。

卒研：もう一つの物語

3年卒研発表会に広島被爆者のお二人がお越しくださいました ―卒研、もう一つの物語―

3年卒業研究発表会、第Ⅰ部の最後に発表したのが川路さん『戦争が奪ってしまうもの、変えてしまうこと』でした。「ピースボート」のプロジェクトで活動されている広島被爆者である小谷孝子さん、三宅信夫さんに実際にお会いし、お話を伺ったようです。彼女はまた、3人の戦争経験者であるアメリカ人にもメールをやり取りしながらそれを自分なりに読み取り、思考を深めていきました。実際に訪れたパールハーバーのアリゾナ記念館・ロスアラモス、広島の原爆資料館、修学旅行で出会った沖縄、伊江島。そこで見たもの、感じたことが素直に表現されていました。

この日は、小谷さんと三宅さんのお二人が学園にお越しくださり、熱心に生徒たちの発表に耳をかたむけてくださいました。川路さんの発表はもちろん、他の生徒のプレゼンについても、自分の頭で考え、自分の言葉で語っていること。そしてそれが質問を受けたときの応答のしかたでよくわかること、お褒めをいただきました。子どもたちも大きな自信になったことと思います。川路さんの、平和のために一人一人が何をしなければいけないか熱く語りかける姿に涙を浮かべている教員もいました。

[アンケートより]

◎日本人だけでなくアメリカ人の方にもお話を伺い、考えを深めたことが本当に素晴らしいと思いました。また、広島・長崎等日本だけでなく、真珠湾に実際に行ったことで、日本人として複雑な思いを持ったということも、戦争というものの現実に直面したこと、その実感がこもっていて、とても考えさせられました。最後に、お話を伺った（被爆者の）方々がお話ししてくださり、「自分の意見を持つこと」「相手の意見を聞くこと」「違いを認めること」「世界中の平和を求めること」これらが本当に重みの

ある言葉として胸に迫りました。私達一人一人が、これからもずっと考えていくべき問題だと改めて感じました。（1年保護者）

今年のノーベル平和賞

今年のノーベル平和賞にNGO「核兵器廃絶国際キャンペーン」（ICAN）が選出されました。ICANは、広島や長崎での被爆者の声を広く世界に伝える役割も果たし、その日本事務局であるNGO「ピースボート」も都内で喜びの会見をし、その模様が各メディアで報道されていました。その中央に、昨年2年生に特別授業をしてくださり、また今年1月の卒研発表会にもお越しくださった広島被爆者の小谷孝子さん、三宅信夫さんのお姿も見ることができました。とても嬉しいニュースでした。

来月には3年生対象に、菅谷昭松本現市長が特別授業をするために明星学園にやってきてくださいます。菅谷氏はチェルノブイリ原子力発電所事故の放射能汚染により甲状腺癌患者が急増していたベラルーシで医療活動を行っていた経験があり、これらの活動はNHKの『プロジェクトX』でも紹介されています。今回、菅谷氏には「21世紀を生きる君たちへの期待」と題し、ご講演をしていただく予定です。今、中学生たちはシャワーのように様々な刺激を受けています。ここで得た小さな種が、どのように芽を出し、成長していくのか、焦らずに見守っていきたいと思います。

私のイルカ研究

田島夏子さん（京都大学野生動物センター）

1991年生まれ。小中高校の12年間を明星学園で過ごす。東京農工大学農学部をへて、京都大学大学院へ進学。御蔵島にある京都大学野生生物センターで、イルカの生態をテーマに研究をしてきた。

13日の水曜日、1年生は5時間目のホームルームの時間を使い、第1回『この人に会いたい』企画が行われました。プレゼンターは、本校卒業生の田島夏子さん。明星学園の小学校・中学校・高等学校と12年間を明星学園で過ごし、国立の東京農工大学に進学、卒業後は京都大学大学院に進学、現在御蔵島の京都大学野生動物研究センターでイルカの研究をしている修士課程1年生です。

人口約300人の御蔵島の周辺には、現在約130頭の野生のイルカが生息しているそうです。田島さんは頭にカメラをつけ、海に潜って水中で泳いでいるイルカを観察・研究しています。イルカの個体識別の仕方、30～40頭の群れの中に入っての観察だからこそ出会える、面白い仕草、実際に自分で撮影した動画を用いてのお話に、1年生も好奇心いっぱいの表情で聞き入っていました。最後の質問コーナーでは、次から次へと手が挙がり、鋭い質問、ユニークな質問がとびだしました。それに笑顔で丁寧に答えてくれる田島さん、素敵な先輩に出会うことのできた1時間でした。

講演の最後に、中学校時代の自分自身のことを少しだけ語ってくれました。小さい時から動物、特にイルカが好きだったこと。中学3年次の卒業研究のテーマを探す時、「自分のやりたいことをやっていいんだよ！」と先生に言われたこと。自分の好きなことって何だろうと改めて考え、やっぱり動物だと思ったこと。彼女の卒研のテーマは『なぜ今、野生動物の数が減っているのか？』でした。「中学生の時に、自分のやりたいことは何か、考えるきっかけを与えてもらえたことはとても大切なことでした。そして、好きなことをやり続けること、そのことでいろんなことにつながっていきました。今、御蔵島でフィールドワークしているのもそのおかげです」。

その言葉に1年生は、何を感じていたでしょうか？　来週の日曜日には、3年生の「卒業研究発表会」があります。その直前にとても素敵な時間を彼らと共有することができました。

信念を持って仕事をするということ

佐藤和孝さん（ジャーナリスト）

1956年生まれ。30年以上にわたり、世界各地の戦場を取材してきたジャーナリスト。アフガニスタン、イラク、シリアなど多くの紛争地を取材し、そこで暮らす人々の日常生活を生き生きと伝えている。

2年生では11月の職場体験を前に、この時期、事前学習として毎年「信念を持って仕事をしている大人」と出会う機会を作ってきています。今回は、学年主任の平山教諭の熱い思いもあり、ジャーナリストの佐藤和孝氏をお迎えすることができました。佐藤さんはアメリカ同時多発テロ・イラク戦争などで現地からリポートを送り続けていた方です。シリアの騒乱ではパートナーの山本美香さんを銃撃で失いました。

初めに「ニュースZERO」で特集された佐藤さんの現地での映像が紹介されました。彼の宿泊していたホテルの隣室が突然銃撃され、死者が出ている生々しい映像が映し出されます。生徒たちは真剣に見入っています。なぜ戦場を取材するようになったのか？「若い頃はただ、欲望があるだけだった。仕事の意味なんて考えていなかった」。

興味、知りたいと思うことと疑問を持つこと。「ただ、欲望だけでは続けられない」この仕事に命をかけることの意味とは？「仕事とは責任だ。もし権力者に知られたら命を失うかもしれないことを覚悟で語ってくれた人達の言葉を、全世界に伝えなければならない責任。妻の山本美香が語りたかったことを、彼女に代わって伝える責任」。

後半は生徒たちの質問に佐藤さんがこたえるという形で、進みました。生徒からは次々と手が挙がり、周りの生徒もメモを取りながら聞いています。

「言葉では伝えきれない」「それは、あなたが考えることです」一見ぶっきらぼうなようでいて、簡単に一つの答えを求めてはいけないと

いうことを語ってくれているようにも感じます。

「どんな仕事をするにも、知識があるということはとても大事なことだよ」「興味を持つことと疑問を持つこと」。

当日は保護者の方も 10 人ほどみえていました。親子でこのような話を聞けるということはとても大切なことだと思います。家に帰ってからどのような会話があったでしょうか。

カンボジアの世界遺産
――アンコール遺跡群を護る

三輪 悟さん（上智大学アジア人材養成センター）

1974年東京都出身。日本大学大学院理工学研究科修了。
1997年より上智大学アンコール遺跡国際調査団に参加。
1999年よりカンボジア・シェムリアップに駐在し、現在はアンコールワット西参道保存修復プロジェクト現地責任者を務める。専門はアンコール建築学。

2年生対象の特別授業に続き、22日には3年生向けに特別講演会が行われました。『カンボジアの世界文化遺産アンコール遺跡群を護るー世界各国による国際協力と上智大学の挑戦ー』と題し、上智大学アジア人材養成研究センターの三輪悟先生をお招きしました。社会科の高橋教諭がアンコールワット修復の事業に参加したときに協力者であったという関係で今回の企画が実現しました。三輪先生は1997年より上智大学アンコール遺跡国際調査団に参加、現在人材養成研究センターの現地責任者をつとめております。著書に『カンボジア 密林の五大遺跡』（共著、連合出版）などがあります。

講演は豊富なスライドを用いながら、生徒の異文化に対する好奇心を刺激するものでした。講演後の質問コーナーでは生徒側から次から次

へと手が挙がりました。その日の深夜、先生から次のような嬉しいメールをいただきました。一部紹介させていただきます。

＜……本日驚きましたことが二点ございました。……二つ目は、生徒からの質問の質が大変高かったことでした。……以下質問事例を挙げます。
①カンボジア国旗のデザインの変遷について
②日本とカンボジアにおける物価の相違の程度について
③日本とカンボジアにおける時間感覚の相違について
④雨期と乾期における気温差について　これまで中学生、高校生、大学生、大学院生、社会人ほか、様々な方を相手に講演をして参りましたが、これほどに的を射た質問を中学生がされるということを、

失礼ながら私は想定しておりませんでした。これには本当に驚きました。生徒の質の高さにびっくりいたしました。

　生徒には、いただいた言葉を一つの自信として、さらに向上心を持って自分の世界を広げていってほしいと願っています。

地震火山列島の歴史を考える

保立道久さん（東京大学史料編纂所名誉教授）

1948年生まれ。日本の古代・中世史研究者。伝統的な実証史学の方法をふまえつつ、『竹取物語』なども歴史研究の対象とする。近年は地震・火山・津波など、古代の自然災害について研究を進めている。著書に『黄金国家』（2004年）、『歴史のなかの大地動乱』（2012年）など。

2年の社会の授業では、飛鳥時代までの学習が終わり、これから奈良・平安時代の学習が始まります。そこで、教科担当繁田教諭が尊敬する歴史研究者である保立道久先生（元東京大学史料編纂所教授）をお迎えし、『地震火山列島の歴史を考える』と題し、2年生対象に特別授業をお願いしました。

保立先生は、近年新しい研究を次々と発表し、古代史研究をリードするトップランナーの一人です。岩波新書『歴史のなかの大地動乱：奈良・平安の地震と天皇』の著者でもあります。

「古代日本では男子は15歳、女子は12歳で成人。今日はそのつもりで君たちにお話しするよ」。そんなことばから、いちょうのホールでの特別授業は始まりました。9世紀には立て続けに大地震や津波、大噴火が起きています。このことが漢文で書かれた書物や考古遺跡の資料で確定されてきているそうです。また、温暖化の影響で飢饉が起こり、疫病が流行ったことも科学的なデータとともに近年分析されるようになってきたとのこと。この9世紀が現代の21世紀にきわめて近いという事実。

「君たちは、こういうことが分かるようになった時代を生きている初めての人間なんだ」。

最後に先生は、ご自身これから取り組みたいと思っていることを3つ挙げました。これからの時代を生きていく2年生は、このことばをどう受けとめていたのでしょうか？

中学生にとってはかなり難解なお話だったかもしれません。しかし、授業の後先生に真剣に質問している生徒の姿がそこにありました。

なぜ人は人の写真を撮るんだろう

馬場龍一郎さん（カメラマン）

ムービーカメラマンとして主にテレビコマーシャル制作を手掛ける。人の優しさをレンズ越しに切り取る「心のフォトグラファー」と呼ばれる。東日本大震災後の「復興の狼煙ポスタープロジェクト」に参加。彼の写真は多くの人を勇気づけた。

カメラマンの馬場龍一郎さんが今日の５校時、2年生のＬＨＲの時間を利用し、講演にやってきてくれました。馬場さんのマネージャーをされている方が明星学園の元保護者であったという関係で、私も親しくさせていただいています。復興の狼煙ポスタープロジェクトで注目を浴び、2012年ＮＨＫ『第63回紅白歌合戦』復興ソング「花は咲く」の背景パネル写真、日本テレビ『ＮＥＷＳ ＺＥＲＯ』震災から2年特集など、テレビ・雑誌・新聞広告など幅広く活躍されています。でも、馬場さんの最も馬場さんらしい活動は、カメラを持って街を歩き、出会ったひとのポートレートを撮影することかもしれません。

「なぜひとはひとの写真を撮るんだろう？」朴訥とした語りの中で、そんな質問が生徒に向けられました。何十枚というひとの写真がスクリーンに映し出されます。生徒たちはポカンとしています。今度は写真でないひとを表現した作品が再びシャワーのように次から次へとスクリーンに映し出されました。「その人の一番大事にしている部分を撮りたい。自分の撮った写真がその人にとって大切なものになるように撮りたい」。彼は震災後の東北を歩き、一人一人了解を取った上で撮影を続けました。そして

撮ったものを直接その人に手渡すことを実践したそうです。写真を撮り、手渡すことで力になりたい。「でも、それは自己満足だろうか？」

彼は今回の講演のために、再び東北を訪ね、撮影に協力してくれた方々を訪問し「あの時写真を撮られて、どのように感じましたか？写真が届けられたときどんな気持ちでしたか？」そ

んな質問を繰り返したそうです。

その時の写真を大切に仮設住宅の壁にはっているおばあさんがいました。「昔の写真はみんななくなっちゃったから」「あのとき、自分が身につけているものが私のすべてでした。家においてあったものは何一つなくなった。リップクリームがなかったのがつらかったな。ゼロからすべてが始まったの」。

「喜んでくれている人は確かにいた。でも全員ではなかった。これが今日一番言いたかったことです。写真は人を元気にさせることができる。でも、時にそれは凶器にもなる。人の心を踏みにじる残酷な道具にもなる」自分のしていることはただの自己満足なのではないか？　相手を傷つけてはいないだろうか？　そう謙虚に自問する馬場さんの姿から表現者とは何かというようなことを感じさせてもらいました。

スマホで簡単に人を撮影するのが日常茶飯になっている昨今、馬場さんの言葉は 2 年生にどのように伝わったでしょうか？

2013年11月6日

地元紙が伝える沖縄
～沖縄に軸足を置いた報道～

西江昭吾さん（沖縄タイムス東京支社報道部長）

現『沖縄タイムス』東京支社報道部長。那覇市生まれ。那覇本社時代には、在沖米軍基地などをメインに記者活動を行なう。沖縄タイムス社編集局による編著『これってホント!? 誤解だらけの沖縄基地』（高文研）が2017年3月に出版された。

卒業間近の３年生のために、沖縄タイムスの西江昭吾さんが来校され、私たちが知らない誤解だらけの沖縄問題について講演をしてくださいました。

講演の前半は，沖縄戦について全般的なレクチャーをいただきました。「鉄の暴風」「住民を巻き込んだ地上戦」「集団自決」「捨て石にされた沖縄」。沖縄の住民のうち４分の１の人が亡くなった、ありったけの地獄を集めた出来事であったとまとめられました。特に本土決戦を遅らせる時間稼ぎのために利用され、望まない形で地上戦や強制集団死に巻き込まれていった沖縄の人たちの状況を強調されました。

後半は沖縄タイムスの記事に沿って、沖縄の戦後生活の話。返還までの米軍占領期間 27 年。沖縄では住民大会が今も頻繁に開かれているが、根っこはこの 27 年間の中にあり、米軍の統治のもと、ルールがおかしいと思ったら自らが要求し、団体で抗議していかないと権利が守られないことを学んでいったとのことです。長いこと米軍が統治し、住民の選挙で初めて行政主席（今の県知事）を選べるようになったのは 1968 年。その間、石川ジェット機事故で小学生が 10 人以上亡くなったり、読谷トレーラー事故でヘリコプターにつるされたトレーラーが

落下して小５の児童が死亡したり、返還後も米兵による少女暴行事件が起き、住民集会が開かれ抗議が行われました。沖縄国際大学に米軍ヘリが落下した事件では日米地位協定により、米軍が民間の大学を勝手に封鎖し、日本の警察が現場に入れない状況が生まれたりと、沖縄における不平等性・不条理性が浮き彫りになりまし

た。

沖縄問題とは何かを一言で言うと、米軍基地が多すぎること。神戸市と同じ市部に基地があるイメージ。嘉手納基地だけで国内の数ある米軍基地を合わせても足りない広さ。そして日本国民との意識のギャップ。沖縄が返還されるまでの間、日本本土の米軍基地や施設は反対運動の中で次々に姿を消していき，国民の意識も薄れていったのに対し、沖縄にだけは基地があり続けていることが問題。

最後に沖縄基地問題で誤解されていることに言及されました。地政学的に沖縄に基地がなければならないという見方に対して、米軍は沖縄に固執しているわけではなく、日本政府が望めば撤退することを言っており，県外で移設ができるなら沖縄にこだわらない政府見解もある。基地による経済効果があるという見方に対しても、基地依存は現在では減り、逆に基地が返還された地区では地元の活性化が見られること。基地があるから他県よりも予算が多く支払われていると思われていることもそういう事実はないこと。つまりは普天間飛行場の名護市辺野古への移設をめぐる問題では、日本政府が国民の無関心、無理解、誤解をうまく利用していると結論づけられました。

沖縄タイムスでは地元の「情」を踏まえ、正しい情報を展開しつつ、戦争で「捨て石」にされ､戦後は米国の「植民地」として差し出され、過重な負担や危険、危機が続く現状を伝えているのだと結びました。

[生徒たちの感想]

◎沖縄に関して誤解している部分も多く、現地の人でないとわからないこともあるんだなと思いました。

◎沖縄がここまで反対運動をしているのに、それがなかなか改善されない理由はどのようなことがあるのか気になった。

◎本土決戦といい、沖縄に集中している米軍基地

といい、沖縄に対する負担が大きすぎる。実際に自分が関わっていないから無関心になったり一つの目線だけでものの善し悪しを決める日本の国民性が嫌いになった。

◎無関心によって起きる本土と沖縄のすれ違いを聞いて悲しくなった。

◎普段のニュースでは聞けないような話で、沖縄に関する理解が深まったような気がします。はずかしかった。

◎沖縄の扱い方がひどい。米国もひどいが、日本もひどい。戦時中の被害はもちろん，戦後の被害がここまであるとは思っていなかった。

◎私自身も問題に対して理解をしなくてはいけないと思います。そこから世界に発信することができる人になりたいです。

◎本当は日本全体の問題なのに、沖縄問題として片付けてしまう政府・国民の無責任さを痛感した。

・今の日本が見て見ぬふりして、きれいな顔をしていることにとても問題意識を感じました。

◎日本の本土の人たち（私たち）が沖縄に米軍基地を追いやったみたいで申し訳ない。今、本土にいる私たちと沖縄で実際に米軍基地の近くで暮らす人々とでどうするべきか、しっかり話し合う必要があると思った。

浅川巧の生き方
～「共に生きる感覚」とはなにか～

畑口勇人さん（浅川伯教・巧兄弟資料館学芸員）

畑口勇人氏（山梨県北杜市教育委員会学術課、北杜市立浅川伯教・巧兄弟資料館職員）
ワイヤーアート作家・古物商として日本やヨーロッパを中心に活躍している。

浅川巧氏　1891年に山梨県に生まれ、朝鮮総督府の林業技術者として朝鮮半島に渡る。林業試験場の技手として山林の緑化活動に取り組むほか、朝鮮民芸に関心を寄せ膳や白磁の研究を行った。兄の伯教や民芸運動家の柳宗悦と協力して景福宮に朝鮮民族美術館を設立したのは、明星学園が開設されたのと同じ1924年のことであった。40歳の若さで亡くなった巧は、現在もソウル郊外の共同墓地で大切に埋葬されている。

12月14日（木）、山梨県北杜市にある「浅川伯教・巧兄弟資料館」の職員、畑口勇人さんが中学3年生対象の特別授業のために、明星学園にやって来てくれました。

先月の公開研究会で中学校の社会科は、「浅川巧」という一人の人物を取り上げました。検定教科書には掲載されていないため、ご存知の方は少ないかもしれません。 巧は、韓国併合4年前の朝鮮半島へ、朝鮮総督府の林業技術者として渡り、植民地下の朝鮮半島の緑化に尽力、また朝鮮工芸の研究者として業績を残し、破壊されていく韓国の工芸品を残すために奔走、1924年、朝鮮民族美術館を開館させました。柳宗悦は「あんなに朝鮮のことを内から分かっていた人は私は他に知らない」と彼を称し、安倍能成（京城帝国大学教授・学習院大学学長）は、「巧さんは官位にも学歴にも権勢にも富貴にもよることなく、その人間の力だけ露堂々と生き抜いていった」と記しています。また忘憂里に建立された巧の記念碑には、「韓国の民芸を愛し、韓国人の心の中に生きた日本人。ここ韓国の土となる」と刻まれ、朝鮮の自然、朝鮮の文化に敬意を払った巧の生き方は、日韓多くの人たちの心に残り、没後90年を過ぎた現在でも多くの人が墓地を訪れています。

生徒からは社会科の授業を通して、いくつもの疑問が生まれてきたようです。その疑問を、専門の方に実際に会って聞いてみたい。そこで今回の特別授業が実現しました。

「自分がされて嫌なことは人にしない。自分以外の誰かの立場、特に弱い人の立場になって

考えること、想像することが浅川巧の根本にあったのだと思います。」そんな畑口さんの穏やかな語りから授業は始まりました。続いて生徒からの質問です。「朝鮮総督府は、浅川にどのような立場をとったのですか？」「巧はなぜ王宮に『朝鮮民族美術館』を建てたのですか？」「この時代に日本政府が望んでいるわけではない美術館を建てることは大変なことだと思うのですが、巧に賛同する人はいたのですか？」「巧は 40 歳で亡くなりますが、彼の遺志は受け継がれていったのですか？」

最後に畑口さんは「自分の頭で考えることの大切さ」を語ってくれました。「巧は自分の頭で考える人でした。国家のいうことでも『それは本当に正しいのか』と考える人でした。そして、人から白い眼で見られようと、思想を行動に移した勇気のある人でした。」「みんなの身の回りにも弱い立場の人がいるかもしれません。そんな時『胸が痛む』ということがあると思います。そこに耳を傾けてください。人の言っていることをただ受け入れるということは『自分の頭で考える』ことではありません」。

浅川巧の生き方をうかがっているうちに、何本もの身近にある糸が見えてきました。巧が「朝鮮民族美術館」を建てた 1924 年（大正 13）は、明星学園が井の頭の地に誕生した年でもあります。巧が日記に記した「自分の個性を大切に思ふと同じく他人の個性をも尊重したらいいのだ」、この言葉は「個性尊重」を教育理念とした本校の創立者、赤井米吉が述べていた言葉でもありました。浅川の最大の理解者でもあり、精神的にも資金面でも彼を支えた柳宗悦は、本校創立時の保護者であり学園を支えてくださった武者小路実篤と同じく、雑誌『白樺』の創刊同人でありました。さらに、柳宗悦の曾孫さんが明星学園に通っていたこともふと思い出しました。不思議なご縁を感じます。

なぜ今、浅川巧なのか？　国家間の問題や組織の中の個の問題、異文化という違いをどう受け入れるか、「専門家」になることの危うさ、思考するための種がこの授業にはたくさん転がっていました。と同時に私自身大きなエネルギーをもらうことができたような気がしました。それは生徒も同じだったのではないかと思います。特別授業の後、さらに何人かが残り、畑口さんに質問をぶつけていました。「卒業したら、山梨の資料館に行ってみないか！」、そんな声が聞こえてきました。

（中学校副校長　堀内雅人）

子どもたちの生きる力を信じて

中村桂子さん（JT生命誌研究館館長）

1936年生まれ。生命誌研究者。日本における「生命科学」の誕生に関わる。それまでの機械論的な生命科学に疑問をもち、ゲノムを基本に生きものの歴史と関係を読み解く、新しい知である「生命誌」を提唱。早稲田大学・東京大学・大阪大学などで教授を歴任。

2018年度の公開研究会全体講演には、中村桂子氏（JT生命誌研究館館長）をお迎えし、参加者全員でお話をうかがいました。テーマは「子どもの生きる力を信じて」。

私たちってどういう存在なのだろう？ われわれはどこから来たんだろう？ まだわからないことだらけだけど、ゲノムを解析することでその歴史が明らかになるといいます。人間を含めたすべての多様な生物は、38億年前に共通の祖先をもっている。けして人間が頂点に立っているのではなく、すべての生物は扇の要から等距離にあるという見方。つまり、人間もまた生き物の中の一つであるという視点。そこに気づいたとき、現代の人間が抱えている様々な問題が浮かび上がってきます。

ここで、特に印象に残った言葉。「生きものの中には違いはあっても格差はない。一本の線で並べて比べるから格差が生まれる」学校での評価は、とかく数字になりがちです。もちろん評価の数値化も必要かもしれません。問題なのは評価の線が一本だけではなく、何本もあることだと思います。「多様性がこの世界を支えている」。「今の世の中は、○か×かの世界になっている。たしかに○か×かで判断することは楽。でも、生きるということは○か×かではない」教育の世界もまさに同じだと思います。○か×かという楽な方に流されるのを自戒しながら、そのはざまで我々は戦っているのだと思います。そこが教育の難しさであると同時におもしろさなのですが。「現代の機械論的世界観を生き物的世界観に捉えなおしたい。機械の特徴は、早くできる・手が抜ける・思い通りにできる。でも、生き物にとって早くできることには意味はない。思い通りにいかないのはあたりまえ。でも、思いがけないところにおもしろさがある。手を抜くのではなく、手をかけるところに喜びがある」。

先生のお話をうかがいながら、なぜか不思議なほど心がほっとさせられるのを感じました。日常の、さまざまな情報や自意識との葛藤が交錯する中で知らず知らず本来の生き物としての人間からずれてしまっている自分に気づいたからなのかもしれません。

2013年11月17日

平和はつくれるか

伊勢崎賢治さん（東京外国語大学総合国際学研究員教授）

1957年生まれ。NGO・国連職員として、シエラレオネやアフガニスタンなどで武装解除に携わり、「紛争解決請負人」の異名をとる。現在は大学教授を務める一方、メディアにも多数出演。トランペッターとして、吉祥寺でジャズライブも定期的に行っている。

11月17日「秋の教室」の全体講演は、明星学園の元父母でもあり、現在東京外国語大学総合国際学研究院教授の伊勢崎賢治さんにお願いすることになりました。講演のテーマは「平和は創れるか？」。伊勢崎さんといえば、紛争解決請負人の異名を持ち、ＮＧＯ、国際連合職員として世界各地の紛争現地（東ティモールやシェラレオネなど）での紛争処理、武装解除に当たってこられた方です。

その情報をどこかで知った高校2年の男子生徒が、一人中学校の職員室までやってきて、伊勢崎さんの話を聞くのがとても楽しみなんだといった話をしていきました。彼の3年の時の卒論のテーマは「日本は社会福祉国家になるべきか」。彼は4月の当初から、こうすれば世界は平和になる、人々は幸せになると自分の考えを熱く語っていました。しかし語れば語るほど異論や疑問が彼のもとに返ってきます。それはそれで中身の濃い学びです。でも当時の彼は素直にそれらを受け入れられず、しだいに他人の意見に耳を閉ざすようになっていきました。でも彼は彼なりに思考を深めていたのでしょう。平和とはそんなに単純なものではない。彼の論文は当初の、ある意味上から目線の自信にみなぎった主張から一変しました。それを私は人間としての彼の成長だと感じながら、一方で卒研発表会の後も、彼には自らのテーマを持ち続け、さらに深めていってほしいと願っていました。本当に重要な疑問ほど、明快な答えはみつかりません。むしろそのような大きな疑問を心の中に抱え続けることができる力こそ人間としての大きさ、強さなのではないかと思います。そのような意味で彼の言葉は私にとってとてもうれしいものでした。

伊勢崎さんにはもう一つの顔があります。ジャズトランペッターとしての顔です。先週、吉祥寺のジャズ喫茶でライブがありました。私も同僚の先生とご挨拶を兼ねて伺いました。死が日常にある世界とジャズ。彼の中でどのようにつながっているのでしょうか。最近、伊勢崎さんの著書『さよなら紛争（14歳の世渡り術）』を読みました。中学生向けにわかりやすく書かれていますが、非常に考えさせられるものでした。次は講談社現代新書の『武装解除・紛争屋が見た世界』を読んでみようと思っています。

[講演会参加者の感想]

◎“国際支援を行うことで、より格差が生まれる”という現実に考えさせられました。言葉を使って考える……話す……だけでは平和は得られない。

……うーん……。（卒業生）
◎少年兵の現実はショックでありながら、現実の一面と理解できました。そこから出発する「教育」とはなんなのだろうと考えさせられました。最後のノルウェーとロシアのお話は、これからの日本のとる道への大きなヒントに見えます。（保護者）
◎平和を求めることで戦争が始まるということをスタートに考えると、全てのことが今までと違ったつながり方をしてきました。でも、平和を求め続けることの大切さを改めて感じました。（在校生）
◎現場で、長期間実体験されたお話は、説得力があり衝撃的でもありました。結論はありませんが、人間社会がどのように展開していくのか（戦争や貧困etc.）、そして今私たちが落とし穴に落ちないために出来ることは何なのかを考えさせられました。数日前に岩波ホールで「ハンナ・アーレント」を観ましたが、つながるものを感じました。（卒業生の母）

2013年3月20日

ぼくらの学校なんだぜ

高橋源一郎さん（小説家・明治学院大学教授）

1951年生まれ。1981年『さようなら、ギャングたち』で小説家デビュー。近年は社会問題への発言も多く、2011年から2015年まで『朝日新聞』で「論壇時評」を担当。現在、同紙上で「高橋源一郎の「歩きながら、考える」」を連載中。近著に、『ぼくらの民主主義なんだぜ』（2015年）など。

3月20日（火）、小中高の教員が一堂に会し、2018年『春の全園研究会』が開催されました。講師は小説家、文芸評論家の高橋源一郎氏（現、明治学院大学教授）。講演のテーマは『ぼくらの学校なんだぜ』

1981年発表の『さようなら、ギャングたち』で小説家デビュー。近年は社会問題への発言も多く、2011年から2015年まで『朝日新聞』で「論壇時評」を担当。現在、同紙上で『高橋源一郎の「歩きながら、考える」』を連載中。近著に、『ぼくらの民主主義なんだぜ』(2015朝日新書)、『丘の上のバカーぼくらの民主主義なんだぜ2』(2016)、『読んじゃいなよ！ー明治学院大学国際学部高橋源一郎ゼミで岩波新書をよむ』(2016岩波新書)、『ぼくたちはこの国をこんなふうに愛することに決めた（2017集英社新書）など。精力的に活動されています。

講演は、子育ての話から始まり、文学、教育の話へと行きつ戻りつしながら展開していきました。さらには、民主主義についての考察、明星学園の創立同人たちが影響を受けたデューイのプラグマティズム哲学の話にまで及びました。

そこに共通しているのは弱者へのまなざしです。耳を澄まさないと聞こえない弱者の声。真剣に聞かないと聞こえない微弱なメッセージ。障害を持った子どもの声に耳を傾けることで、親として多くのことを学んだと言います。読者の声を聴くことで作家は成長する。先生は生徒からどれだけ多くを教わることができるか。社会的弱者や障害者を守ってあげようではなく、

そういう人がいると周りが元気になるという事実。

教員がどれだけの権力を持っているか自覚はあるか？

上から下へのメッセージは畢竟声が大きくなり、生徒の声を聞き取る感度が鈍る。自分は生徒の前で正しさを振りかざしていないか？

生徒は沈黙し、あるいは教師の顔色をうかがうようになる。その時教師は生徒から何も学ぶことはできない。ユーモアを交えた柔らかな言葉ながら、鋭い主張が続きます。

高橋さんのお話をうかがいながら、「強さ」とは何だろうと考えさせられました。自分自身を振り返ってみても、自信のないときほど教師としての正義を振りかざしていた気がします。余裕のないとき、生徒の大切な声は耳に入ってきません。「悪い施設（学校）はマニュアル通り、良い施設（学校）ほど何も言えない人の話を聞いてあげる」、そんな話もありました。難しいことです。マニュアルを守っていれば確かに悩まずに済む。自己決定の責任から逃れることができる。しかし、それでは教師としての成長はない。そこからどう脱却するか、すべての教師が目指すべきところだろうと思います。

最後に高橋さんは、「自戒を込めてです。難しいことですよね」と、にこっとしながらおっしゃいました。「大切なのは楽しいことです。正しいことより楽しいことを。教育されようとする主体がないと教育は成り立たない。生徒が本当の先生を見つけるきっかけを作ってあげたい。それを目指して私は授業をしています」。そんな言葉で 2 時間の研究会は、お開きとなりました。

ご協力いただいた講師の方々

安田菜津紀さん（フォトジャーナリスト）

菅谷 昭さん（元医師、単身ベラルーシに医療支援に。現松本市長）

アーサー・ビナードさん（詩人・俳人・随筆家）

ダグラス・ラミスさん（政治学者・「世界がもし100人の村だったら」監修）

植原量行さん（東海大学海洋学部海洋地球科学科教授）

雨宮彩葉さん（ピアニスト）・AYUKOさん（ボーカリスト）

早稲田大学男声合唱団 Chor Flügel

「ヤイレンカ」（アイヌ女性ユニット）

沙央くらまさん（元宝塚歌劇団・卒業生）

柳亭小痴楽さん（落語家・卒業生）

佐藤節子さん（着物染織家）

小谷孝子さん（被爆体験腹話術証言者）・渡辺里香さん（ピースボート）

田島夏子さん（京都大学野生動物センター）

佐藤和孝さん（ジャーナリスト）

三輪 悟さん（上智大学アジア人材養成センター）

保立道久さん（元東京大学史料編纂所教授）

馬場龍一郎さん（カメラマン）

西江昭吾さん（沖縄タイムス東京支社報道部長）

畑口勇人さん（浅川伯教・巧兄弟資料館学芸員）

中村桂子さん（JT生命誌研究館館長）

伊勢崎賢治さん（東京外国語大学総合国際学研究員教授）

高橋源一郎さん（小説家・明治学院大学教授）

明星学園中学校特別授業

この人に会いたい

編　集　明星学園中学校
発　行　学校法人明星学園

住　所　東京都三鷹市井の頭5-7-7
ＴＥＬ　0422-43-2195
ＦＡＸ　0422-47-6905

ウェブサイト　https://www.myojogakuen.ed.jp/

Myojo